

ペルジーノの《ガリツィン祭壇画》とフランドル派の《磔刑》との関係

—カ・ドーロにあるファン・エイク派の《磔刑》を中心に—

江藤匠（東洋大学）

ピエトロ・ペルジーノは1480年代前半に、後に教皇アレキサンデル六世になるローマの神学者バルトロメオ・バルトーリから祭壇画の制作を受注した。この《磔刑》を主題とする三連画は、現在はワシントンにあるが、19世紀にはモスクワ公が所持していたので、別名《ガリツィン祭壇画》と呼ばれている。その受難の場面は、三連画を貫通する風景の導入によって夢幻的な雰囲気にならされており、1989年のJ. ウッドの研究以来、フランドル絵画からの造形的、図像学的な影響が指摘されてきた。ウッドはその手本として、1470年代にウルビーノの宮廷で活躍したヨース・ファン・ヘントの《磔刑》を挙げているが、それがイタリアにあったという証拠はない。むしろ当時の北イタリアでは、ファン・エイク派の《磔刑》が広く知られており、その影響下の作例が残されている。ペルジーノの《磔刑》の構想に影響を与えたのも、そのエイク派の《磔刑》のヴァリエーションではないのか、というのが本発表の主旨である。

1998年にK. クリスマンセンは、《ガリツィン祭壇画》におけるロヒールファン・デル・ウェイデンの《スフォルツァ祭壇画》の影響を指摘した。この《磔刑》は、ペーザロ侯スフォルツァによって発注されたので、早くからイタリアにあったことは確実である。両者を比較してみると、十字架高くキリストの腰布が風にたなびいていること、背景にパノラミックな風景が広がっているなどの類似点に気付く。さらに、トゥルネー在住のピエモンテの貴族オベルト・デ・ヴィラがロヒールに注文した、同工の《磔刑》がトリノにあった。しかし《ガリツィン祭壇画》には、ロヒールの人物像特有の大仰な身振りの感情表現は見られない。ペルジーノの《磔刑》の人物像で注目されるのは、聖ヨハネが下腹部で手を組んで仰ぎ見るという身振りで、その抑制された人物の姿態はヴェネチアのカ・ドーロとパドヴァの市立美術館に所蔵されているファン・エイク派の《磔刑》に見いだせる。またここでは、紺色のローブをまとった聖母と真紅のローブを片脱ぎにしたヨハネを対比させているが、その点もペルジーノの《磔刑》と共通している。

このファン・エイク派の《磔刑》に類似した作例は、ヴァチカン美術館に所蔵されるヴェネチア派と関わりの深い画家ニコロ・ダ・フォルニョの三連祭壇画が証左するように、すでに15世紀後半にはローマに移入されていた。周知のようにペルジーノは、1480年代初頭にシスティナ礼拝堂の壁画制作のためローマに滞在していた。この連作壁画では、《洗礼》の場面のように、ファン・エイク的なプラトー構図の導入が図られている。そこで発表者は、1480年代半ばの《ガリツィン祭壇画》の制作に際しては、当時ローマに招来していたファン・エイク派の《磔刑》のヴァリエーションの知見が反映していたと推断した。